

有孔鏝付注口土器の正体〈補遺〉

西川博孝

1 はじめに

本誌第77号において表題の拙論を発表した^{注1)}が、その後も関係資料を追跡していたところ、多くの遺漏や新規の報告が確認された。また、紙数の関係で掲載を省略したものや拙速により分類を誤った例もあったことから、訂正を含めて追加資料をここに提示し、前回の論考を補足することとしたい。なお、前回取り扱ったもののうち、有孔鏝付土器、有溝小把手土器は大量の追加があったため、今回は見送り、機会を改めて提示したい。また、東北の資料は今後震災関連の報告が大量に見込まれるので、これも前回の遺漏以外は見送ることとした。

2 前回分類の訂正及び追記

前回の神奈川県新戸遺跡第1図2例は大型把手の上端にあく孔を注口もどきの横向き突起と理解した。しかし、口縁部は1/4強が欠損していることから、大型把手の対面に同じ大型把手が、そしてこれらと直交する欠損部には注口が付いていた可能性もまた考えられる。そうすると、当該例は横向き突起を兼ねた大型把手を1対持つ、深鉢形の有孔鏝付注口土器と解釈することもできる。しかし、後述するように第3図6例のような近似の器形と紋様を持つものでも注口と孔を欠

くものもあり、注口の有無について本例は確証が持てない。したがって、しばらく断定を避け、類似例の発見を待つこととしたい。

前回の第5図16・22は横向き突起付土器であるが、口縁部の横向き突起と直交する同位置に横方向にあく小孔があり、追記しておく。

同じく第6図28は、報告書に「口縁下には鏝状の突起帯が波状に巡り、6個の孔が穿たれている」との記載があった。したがって、当該例は東北系の瓜実形土器でありながら、体部文様は関東系の無紋地に微隆起線紋様を持ち、かつ有孔鏝付という、現在唯一のきわめて珍しい事例であった。

第7図5は注口・横向き突起付土器としたが、報告書には「口縁直下に…鏝が付され、(中略)鏝には上下に切断するような穴が認められる」との記載があり、有孔鏝付注口土器であると判断される。口縁部と丸みを持つ体部はほぼ同じ径であり、深鉢形と瓢箪形の間器形を持つ。

また、第7図6は注口・横向き突起付土器としたが、器形をよく見ると瓜実形と見るのが適当と考えられる。器全体に梶山類の文様を配しており、類例がなかったことから誤った。

以上、報告書の読み込み及び資料観察の不足があった。御寛恕願いたい。

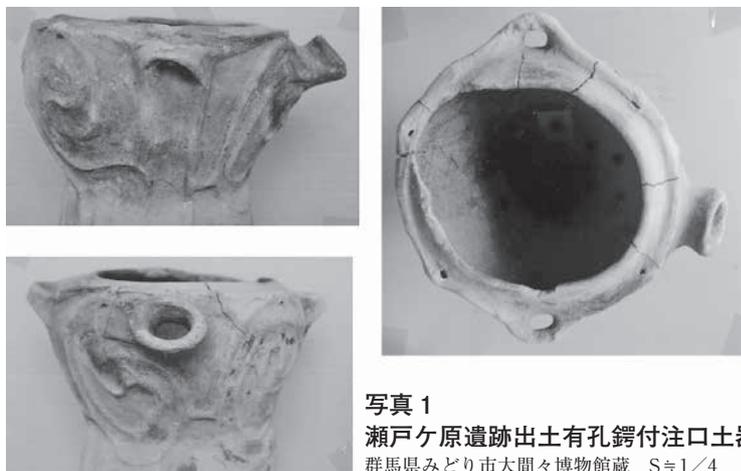
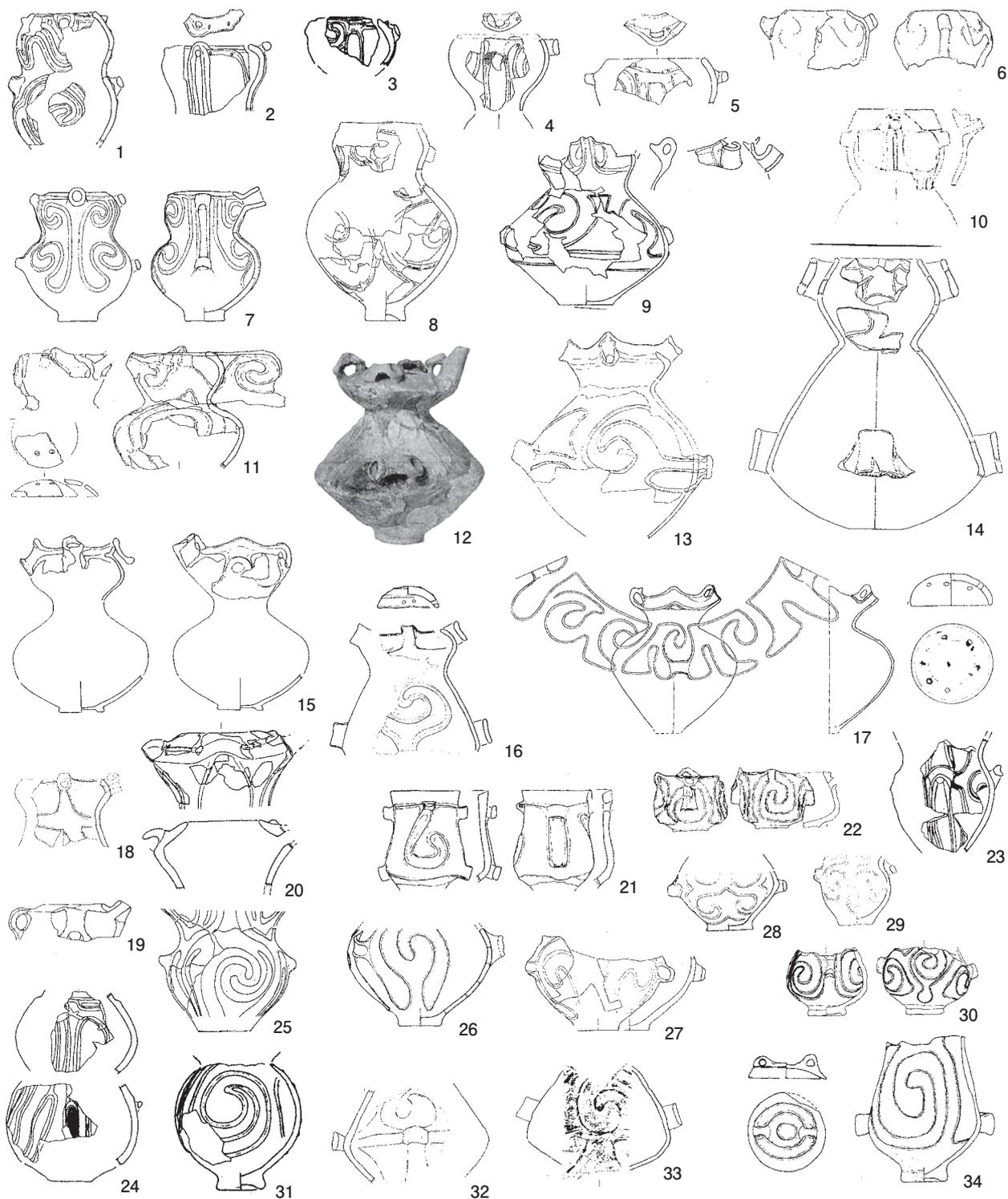


写真1
瀬戸ヶ原遺跡出土有孔鏝付注口土器
群馬県みどり市大間々博物館蔵 S≒1/4

3 各器種の追加資料

(1) 有孔鏝付注口土器・瓢箪形注口土器

写真1は群馬県瀬戸ヶ原遺跡から出土した有孔鏝付注口土器である。体部下半は欠失しているが、体部上半は口縁の一部を除いて完存している。器形は典型的な深鉢形態である。鏝にあく孔は4個でほぼ均等に配されており、同型の江原台例(前回第1図1)と異なり規則性が認められる。伴出土器は不明だが、江原台例とほぼ同一時期と思われる。



有孔罎付注口土器 1 下田5区1住 (群馬) E 3 新、2 大島上ノ原 (神奈川)、3 堀ノ内1次 (埼玉)、4 山之上4土 (東京) E 4 ?、5 うならず (千葉)、瓢箪形注口土器 6 前貝塚堀込貝塚80土 (千葉) E 3-4、7 武蔵台東J 63住 (東京) E 4、8 北原No.9 (神奈川)、9 上ノ宿2次I (茨城)、10 吉見台 (千葉)、11 小田野4・5次SI08 (東京) 称~堀1、12 谷地 (群馬)、13 桜の木A515土 (栃木)、14 古宿 (栃木)、15 出松J 74住 (神奈川) 称1~2、16 鶯谷42住 (東京) 称1~2、17 江原台321土 (千葉)、18 南三島1・2区SI99 (茨城) 称?、19 砂川21土 (茨城) 称1、20 笹山 (新潟)、同系小形21 飯積原山 (78) SK988 (千葉) 称1、22 浄法寺 (栃木)、どちらか不明23 屋代遺跡群SB5339 (長野)、24 屋代遺跡群 (長野)、25 宿東A区16住 (埼玉) E 3 新、26 生谷境堀9住 (千葉) E 3 新~4、27 うならずA-002住 (千葉) E 3-4?、28 黒谷田端前5住 (埼玉) E 4、29 多田374土 (千葉) E 4 古、30 寺野東SK299 (栃木) 称1、31 大月13住 (山梨) 称1、32 皿沼7住 (埼玉) 称1、33 中台SI227 (茨城)、34 上谷津第2 7住 (千葉) 称1 12 : S=1/8、その他 : S=1/8

第1図 有孔罎付注口土器ほか

第1図1は同じく群馬県下田遺跡出土の有孔罌付注口土器で、体部上半と下半はほぼ径が等しく、深鉢形と瓢箪形の間形態を取る。口縁部は注口の周辺とこれに直交する横向き突起1個が残っており、孔は注口の両端等4個が残る。同図2～5はいずれも注口を欠く口縁部の破片で、瓢箪型の器形と思われる。横向き突起の両脇などに孔があく。瓢箪器形で横向き突起を持ち、かつ罌に孔があくものは、有孔罌付注口土器以外に現在発見されていないから、同種であると見てよいと考えられる。

以上のように、前回分を含めて有孔罌付注口土器のうち、深鉢形は江原台例、瀬戸ヶ原例の2点と不確実な新戸例1点となった。また、深鉢形と瓢箪形の間形態はキサキ例、下田例及び前項で訂正した南三島例の3点で、瓢箪形は9例となった。したがって、有孔罌付注口土器の主体的な器形は瓢箪形であり、その他の器形は主体とならないと思われる。

第1図6～20は瓢箪型注口土器である。このうち、前回提示した変遷観に従えば6～8・10・11は中期、他は後期称名寺式期と思われる。ただし、11は称名寺各式から堀之内1(古)式が伴うが、これらは混在と考えたい。なお、11・16・17はほぼ確実に蓋が伴う。蓋には2個1対の孔が1単位ないしは2単位であく。おそらく、本体の注口付け根とその対面に付く橋状突起の両方または一方に、ひもなどでつなぎ止めたのであろう。20は新潟県の出土事例である。21・22は前回第8図23・24とも形態が異なる広口の小型土器である。どちらも注口の対面には橋状突起が付く。21は確実に称名寺1式が伴い、22も後期に属しよう。

以上、瓢箪形注口土器はより多くの事例が追加された。中期に属するものもあるが、主体は後期に属するもので、当該例は称名寺式(前半期)に盛期を迎えることが一層はっきりした。また、前回示した変遷観に矛盾する資料も見当たらなかった。

第1図23～34は体部上半ないしは口縁部の大部分が欠失しており、有孔罌付かどうか判断がつかねる。大部分は体部下半が瓢箪形の器形をなすが、23は明らかに深鉢器形を持ち、その可能性がより高い。25は加曾利E3(新)式がほぼ確実に伴い、23～29は中期に属すると思われる。30～34は称名寺式期で、30・31は球形、32・33は下膨れ形をなす。34は他に例のない長胴であるが、32・33と同じく底部付近に最大径を持つ。蓋が伴う。

(2) 注口土器

第2図1～11は浅鉢ないしは鉢形の注口土器である。1～5は加曾利E3-4式、6～10は同4式に属すると思われる。11は時期不明だが、注口下に波状隆線が巡り、より古い可能性がある。2は球形胴に近い鉢形、3～6・11は口縁が内傾または内湾した鉢形、7は口縁の下から底部にかけて直線的にすばまる鉢形、8～10は浅鉢形をなす。また、1・8には注口の対面に、9は注口上に橋状突起が付く。前回提示した第4図24～26の鉢形注口土器は、1点が注口上とその対面に橋状突起が付く、2点は突起を持たないものであった。このように、当該例には器形や橋状突起の付き方にいくつかの種類があるのであろう。6の前田村例が混在とすれば、鉢形が古く、浅鉢形が新しいと見ることもできよう。深鉢は第2図11・12の長野県例が追加された。いずれも続加曾利E4式で、12には前回第4図20と同じく注口上に橋状突起が付く。

以上、注口土器には他の器種のような無紋地微隆起線紋を施す例はなく、いずれも地紋を持つ。東北の注口土器の器形と注口という装置をそのまま受け入れたものと評価されよう。

なお、13は前回省略した福島県の例である。小型の樽形土器で注口が付く。器体を取り巻く微隆起帯は注口上と背面2か所から立ち上がって連結し、3窓の吊手となる。前回第4図14～19に示したとおり東北ではさまざまな器形や小型土器に注口が付く。これもその1例であろうが、異形の土器である。

(3) 横向き突起付土器

第3図1～5は深鉢に横向き突起を取り付けた例である。1～4は地紋ないしは紋様を持ち、5は無紋である。このうち、3・5は上下に並ぶ突起を隆帯でつなげている。5は山梨県の例で、前回で深鉢形は北・東関東に分布が限られるとしたが、さらに広がりをもつことが判明した。

6は無紋地に微隆起線紋様を施す。口縁部から胴上半は完存しており、有孔罌付注口土器によく似ているが、確実に孔と注口がない。器形は深鉢と瓢箪形の間形態を持つ。前回では確認できなかった事例である。7は口縁部の一部が欠失しており、ここに注口があれば深鉢と瓢箪形との中間形態を持つ注口土器となり、注口がなければ6例と同類となるが、どちらも判断できない。所属時期はいずれも加曾利E3(新)式期である。この孔と注口を欠く事例はこれまで確認さ

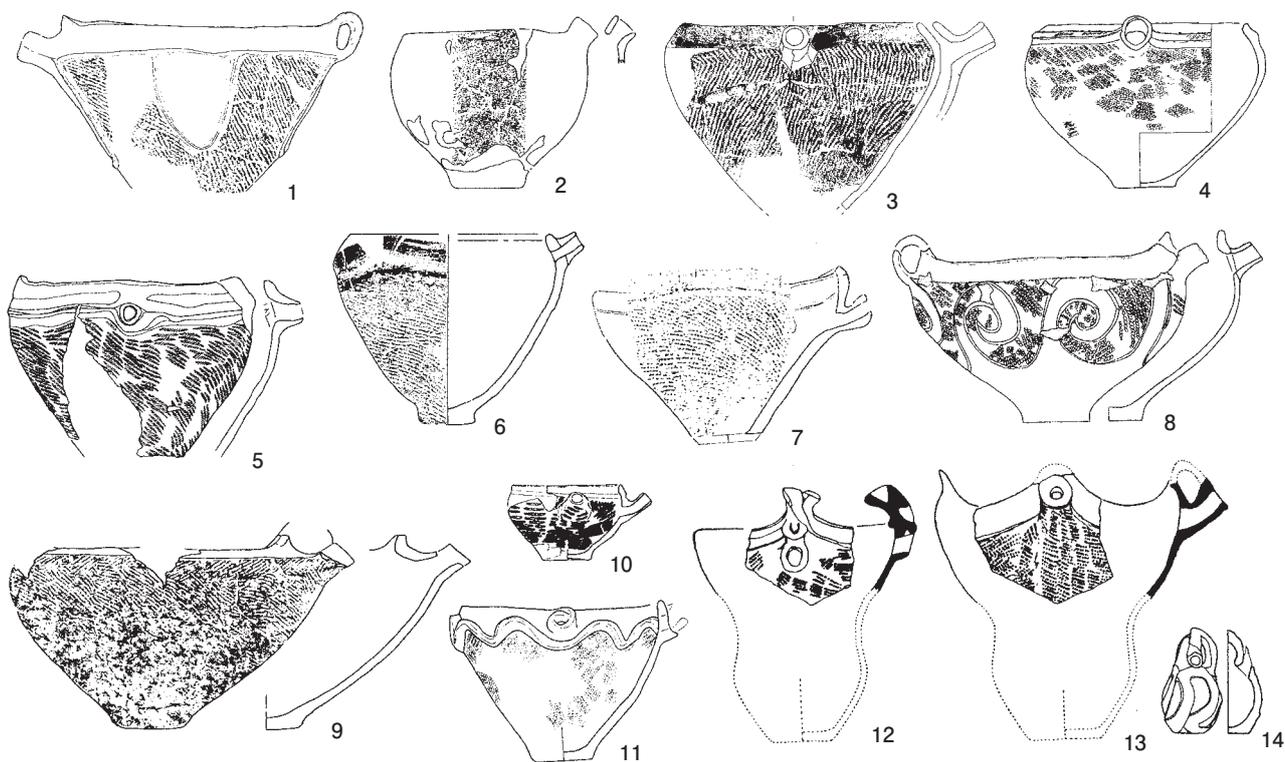
れていない。有孔罎付注口土器の近縁種として注意されるが、今後注口、孔、横向き突起といった装置のうちいずれかあるいは全部を欠く種も発見される可能性は十分考えられる。

8～14は球形胴鉢形の横向き突起土器で、14の底部には高台が付く。8は秋田県から出土したもので、関東で誕生した同種土器が東北北部まで及んでいる希少な例である。横向き突起は口縁直下のみに付く8・13・14と口縁直下と胴下部に対となつて付き、微隆起線でつなげる9～11がある。また、8・10・12のように横向き突起自体に左右に貫通する孔があくものがあり、8にはさらに2の項で追記した前回第5図22と同様の、対向する横向き突起の中間に左右に貫通する孔がある。なお、11の紋様は前回第5図19の埼玉県古井戸遺跡例と大きさは異なるが、まったく同一である。

この種の球形胴鉢形は卓見の限りでは、前回と合わせ12例となった。近縁の主要な器種ほどではないが、祭祀用土器として一定の役割を果たしていたと位置づけられよう。

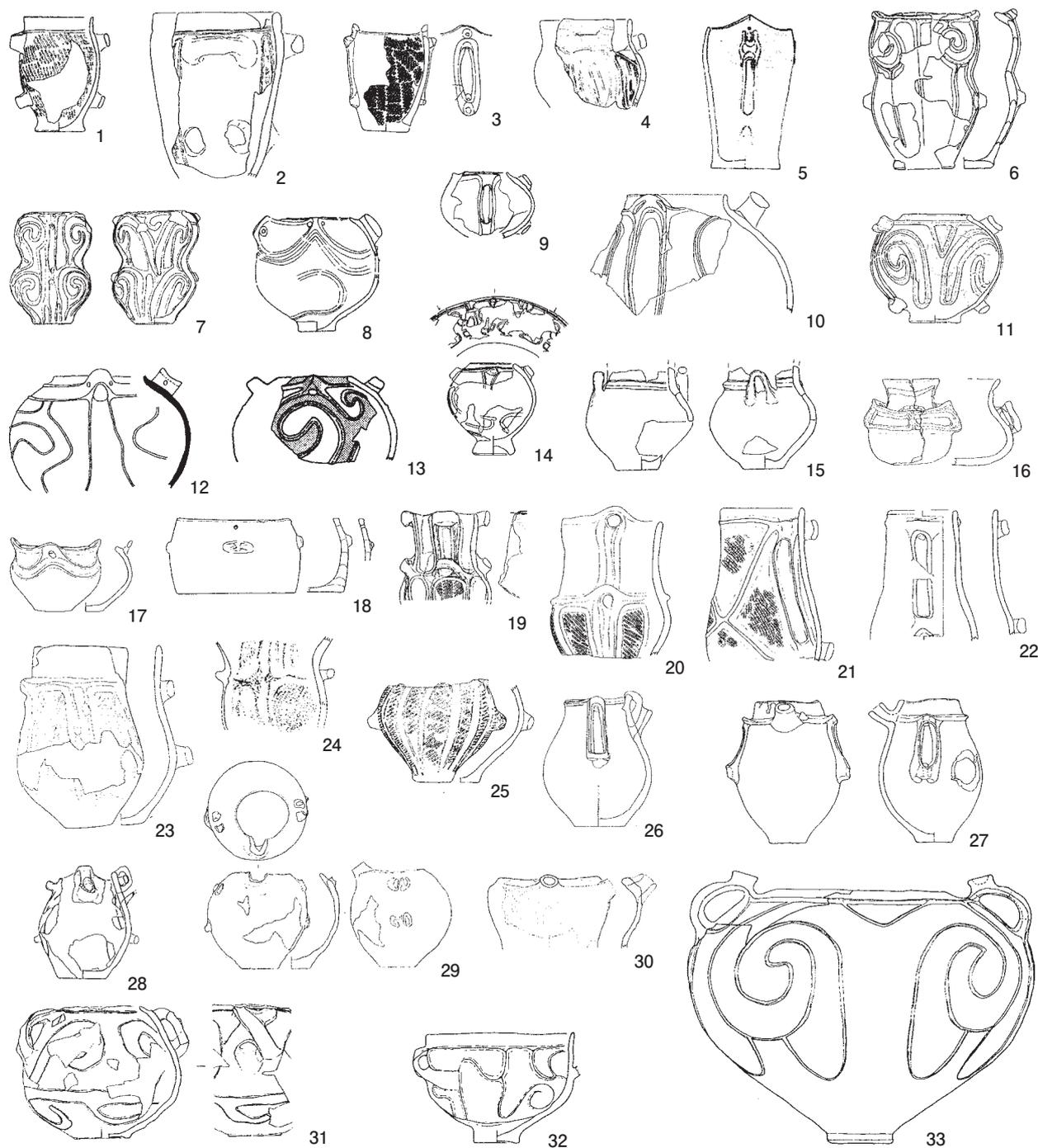
15・16は壺形器形で、いずれも異なった横向き突起が付く。15は棒状粘土を貼り付けた背の高い横向き突起で、加曾利E3(古)式期と古い。16は体上部に隆帯による4単位の枠状区画を配し、区画同士が接する2か所に横向き突起が付く。17は鉢形の器形で、4単位の波状突起下に縦方向の孔があき、横向き突起と解される。孔の下には波状の微隆起線紋が巡る。18は底の広い鉢形の器形で体上部に4単位の横向き突起が付き、各々の上に孔があく。土坑内から諸磯b式に伴って出土しているが、前期には横向き突起の例はなく、周辺から出土している中期末の所産と理解しておきたい。

壺形・鉢の横向き突起土器も今回新たに確認された。同様の器形は前回第5図23の橋状突起が複合したものがあつたにすぎない。本来、壺形器形は主流とならなかつたのであろう。なお、加曾利E3(古)式に伴う15忠生例の横向き突起は、粘土棒を貼り付けただけの簡略なもので、他の多くは幅があり、しっかりと取り付けられているのとは異なる。同様の簡略な例は前回第5図15・18・20・27があつて、時期が確定できるものは加



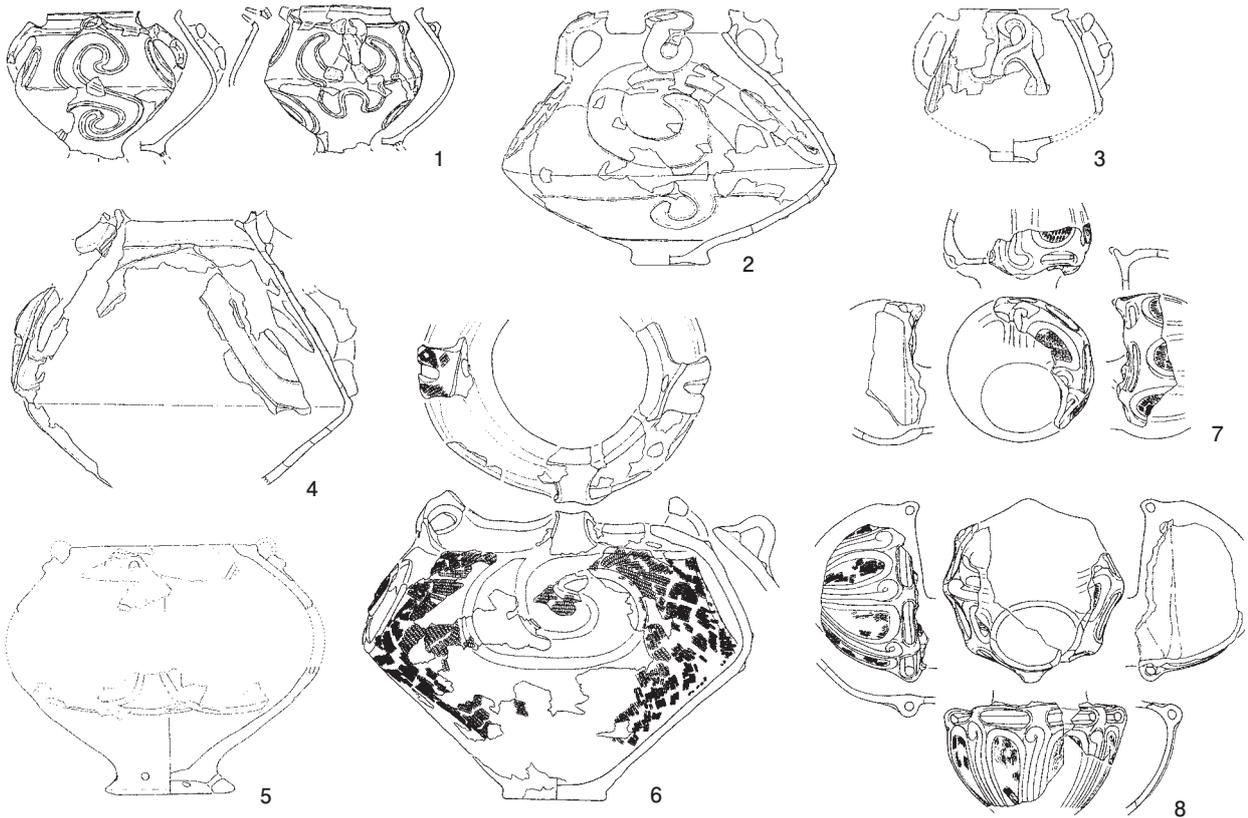
注口土器浅鉢・鉢 1多摩ニュータウンNo380(東京)E3-4、2多摩ニュータウンNo235 5住(東京)E3-4、3上柳沢184土(群馬)E3-4、4徳丸仲田(群馬)E3-4、5屋代SB5348(長野)E3-4、6前田村6土(茨城)E4中、7三原田(群馬)、8前原(東京)E4古～中、9裏宿9住(東京)E4中、10御城田750土(栃木)E4中、11槻沢(栃木)、同深鉢12・13宮平(長野)称1、東北小型異形14上納豆内58住(福島)大木9末～10? S=1/8

第2図 注口土器



横向き突起付土器深鉢 1 前田村347住 (茨城) E 3 中 2~新、2 岩舟台75土 (栃木) E 3 新、3 林中原Ⅱ62区 2 住 (群馬) E 3 新、4 大谷貝塚 (茨城)、5 金の尾23住 (山梨) E 3-4、6 多摩ニュー-No72 312住 (東京) E 3 新、7 中井63住 (埼玉) E 3 新、同球形胴鉢 8 下堤F8住 (秋田) 大木9-10末~10古、9 屋代ST5111 (長野) E 3 新、10 屋代SB5319 (長野) E 3 新~3-4、11 大牛下原86土 (群馬) E 3-4、12 岩坪 (茨城)、13 一ツ家 (長野)、14 大木戸 I 8-1住 (埼玉) E 3-4、同壺ほか 15 忠生A-1区 112住 (東京) E 3 古、16 寺脇7住 (埼玉) E 4、17 槻沢ⅢSK374 (栃木) E 4、18 二軒在家原田ⅡD-2土 (群馬)、瓜実形土器 19 滝ノ上 I SK236 (茨城)、20 小場 (茨城)、21 前田村C区199住 (茨城) E 3 新、22 中台SK472 (茨城)、23 うならすずA-010住 (千葉) E 3 新、24 うならすずA-029住 (千葉) E 3 新、25 うならすずA-040住 (千葉) E 3、注口・横向き突起付土器 26 坪井上 (茨城)、27 忠生D区 1 住 (東京) E 3-4、28 アチャ平 (新潟)、29 神ノ木24B住 (埼玉) E 3-4?、30 飯積原山 (14) SK127 (千葉) E 3-4、有孔鏢付土器変化形 B 31 南三島 1・2 区SI45 (茨城) 称、32 開護台344土 (千葉) 称?、33 裏宿6住 (東京) S=1/8、35: 不明

第3図 横向き突起付土器ほか



橋状突起付注口土器 1 北野（新潟）称、2 アチャ平（新潟）称、3 アチャ平SK483（新潟）称、4 アチャ平SI256（新潟）称、5 五百川（新潟）、6 白倉下原B区100土（群馬）称、注口付有溝小把手土器 7・8 横壁中村18区1号埋没河道（群馬）E 3 中 S=1/8

第4図 その他の注口土器

曾利E 3（古）～（中）式で、いずれも関東出現の初期段階に相当する。横向き突起の時間差を示すものと思われる。

(4) 瓜実形土器

第3図19～23は瓜実形土器で、24・25は器形と紋様から同種と見るのが妥当であろう。21は全体に簡素ながら梶山類の文様を配しており、2の項で訂正した前回第7図6の上欠例と近縁となる。19・20も関東的な紋様が施され、前回の確認事例と同様、東北出自の瓜実形土器の器形のみが関東において採用されたものと思われる。また、これら追加例は茨城、千葉両県の出土で、前回の確認例も9例のうち7例は北・東関東のものであり、瓜実形土器の東北からの流入状況をよく示している。

前回は関東の瓜実形土器の時期について、1点は加曾利E 3（古2）式で、多くは同E 3（新）～E3-4式と幅を持たせた。今回の追加例はE 3（新）式が多い。また、25例は幅の狭いネガH字状紋で、やはりE 3式の

範囲内に収まる。したがって、現状ではE3-4式に下るのは前回第6図27の新山台例のみとなるから、関東では瓜実形土器はE 3（新）式段階でほとんど姿を消してしまうと思われる。東北独特の器形は結局関東では定着することはなかったのであろう。

(5) 注口・横向き突起付土器

第3図26～29は注口を持つ横向き突起付土器である。いずれも無紋で、26～28は樽形、29は球形胴の鉢形である。26・27は上下の横向き突起が隆線につながっており、26・28は注口の上に接して橋状突起が付く。29は対向する横向き突起に対して、注口はこれと直交する位置から明らかにずれており、上下に並ぶべき横向き突起の位置もずれている。

30は深鉢で縄紋が付く。前回第7図7～9と同類である。

注口と横向き突起の付いた鉢ないしは壺形の土器は前回第7図10・11が認められたが、いずれも紋様があり、無紋の例も存在することが今回確認された。時期

第1表 器形・紋様と各装置の組み合わせ

	有孔罅付(A)	注口(B)	横向き突起(C)	(A)+(B)	(A)+(C)	(B)+(C)	(A)+(B)+(C)	橋状突起(D)	(C)+(D)	無し(O)
深鉢形+地紋無し			□				○			
深鉢形+地紋有り		○	○			○				
瓢箪形+地紋無し						●	●			
瓢箪形+地紋有り			○							
中間形+地紋無し			□				○			
中間形+地紋有り						○				
瓜実形+地紋無し	□		○							
瓜実形+地紋有り			●			○				
球形銅鉢形+地紋無し	●	○	●			○		○	○	○
球形銅鉢形+地紋有り		□				○				
球形銅鉢形+無紋						□				
樽形+地紋無し			○		○					
樽形+地紋有り		○	○							
樽形+無紋						□				
浅鉢形+地紋無し										□
浅鉢形+地紋有り		●								
鉢形+地紋無し								□		
鉢形+地紋有り			○							
壺形+無紋			□							

*無し(O)は罅付のみを含む **○は前回確認、□は今回確認 ***●は主要器種

は26・28が不明で、27が加曾利E3-4式期、29も同期と思われる。27ないしは26・28の樽形器形は前回第4図22の寺野東の注口土器とよく似ており、前回第5図16・17の横向き突起付土器とも近い。また、29は第2図2の鉢形注口土器に器形に近い。無紋の例は同じ第3図の中にもあり、互いに密接な関連があることがわかる。

(6) 有孔罅付土器変化形A・B

第3図31・33は前回有孔罅付土器変化形Bとした無紋地に微隆起線紋様を持つ鉢形の土器で、対向する橋状突起が口縁に付く。33は他に類のない大型土器で、E4(古)式期と思われる。31の突起は「8」字の下半が解放した特徴的な形状で、後期初頭と思われる。32は口の開いた鉢形で、中期には類例のない器形である。中期末とともに続E4式と思われる破片も伴っており、これも後期の可能性がある。時間の経過とともに器形も著しく変容する例として理解しておきたい。

(7) 橋状突起付注口土器

第4図1は新潟県北野遺跡から出土した橋状突起の付いた注口土器である。器形は体中央が張り出すそばん玉形の広口壺で、注口は口縁直下に付き、注口と対面する同位置には小型の橋状突起が付く。また、これらと直交する位置には第3図34と同様の「8」字の下半が解放した形状の大型橋状突起が対向して配される。2~4のアチャ平例も注口は確認できないが近似の器形と突起を持ち、同時期、同類であろう。5も欠損部分が多いが同様と思われる。阿部昭典氏はこれらの存在を抽出した上で、下越地方を中心として分布すると指摘している^{注2)}。6はこれと近い群馬県の出土

例である。器形・紋様はほぼ同じであるが、地紋に縄紋が付く。口縁部に3個の橋状突起が残る。図正面には単純な橋状突起が、これと直交する位置にはやや大きい橋状突起が付く。後者の中央には幅広のスリットが入り、内面側にも孔が貫通している。小型の橋状突起の対面は残念ながら欠失しているが、上記の例からおそらく注口があったと思われる。なお、口縁端部は内折して明らかに蓋受け機能を果たしている。大型の蓋が乗るのであろう。下越地方の周縁では変容した同器種があるのであろう。

(8) 注口付有溝小把手土器

第4図7・8は最近公表された新種の土器である。同一地点から2点出土しているが、いずれも完形ではない。有溝小把手土器の一種であるが、口部の大部分はふさがれていて、やや大きい注口が偏って取り付けられていたと思われる。図からは判読しにくい。須恵器の平瓶を想起すると理解しやすい。注口部は立ち上がり部分がわずかに残るのみで、卑見によれば、立ち上がり径は図よりも幾分小さいように思われる。時期は体部紋様から加曾利E3(中)式期であろう。上記で扱ってきた注口を持つ一群の土器とは出現の経緯が異なるらしい。完形土器の発見に期待したい。

4 まとめ

有孔罅付注口土器は深鉢形、瓢箪形、その中間器形の3種があり、今回の追加によって瓢箪器形が主体であることが明確になった。また、3者間に時期的な差は今回も確認できなかった。

瓢箪形注口土器はさらに追加例があったが、前回示した時期的な変遷観に矛盾は認められなかった。

両者の関係については、今回も伴出土器から見て、深鉢器形から瓢箪器形への変化は想定できなかった。また、瓢箪器形の有孔罎付注口土器と瓢箪形注口土器とは罎部の孔を除いて違いはなく、同時期に出現したのは明らかである。したがって、量的に主体とならない深鉢形及び中間器形の有孔罎付注口土器は両者の祖形ではなく、派生的な土器と考えられよう。今回確認された第3図6の土器は、その中間器形で同紋様と横向き突起を持ちながら、孔と注口を欠く新種であった。そうすると、同様の器形、紋様を持ちながら、孔、注口、横向き突起といった装置のうち、いずれか一つあるいは全部を欠く種も今後発見される可能性がある。

また、2の項で訂正した前回第6図28例は瓜実形土器に有孔罎付が取り付けられており、この器種でも同様の現象が認められる。

第1表はこれまで見てきた一連の土器を器種と紋様を縦軸に、各装置及びその複合を横軸にして、存在が確認できたものを示した。これを見ると、①実に多様な器種・紋様と各装置の組み合わせが存在すること。②東北起源の注口と横向き突起をさまざまな器種に組み込もうとしていること。③その中で主体となる組み合わせはわずかであること。④一方、有孔罎付はわずかな器種にしか継承されないこと。以上の点が指摘できる。

以上、長々述べてきたが、結局のところ前回と同様の結論となった。すなわち、有孔罎付土器をベースに新たな祭祀的土器を創出する過程で、東北の影響を受けてさまざまな試行錯誤がなされたが、その地位を最も強く継承したのは瓢箪形注口土器であり、有孔罎付注口土器は両者をつなぐ存在ではなかったと考えられるのである。

本稿を草するに当たり、群馬県埋蔵文化財調査事業団、みどり市大間々博物館、富岡市教育委員会、藤岡市教育委員会には、資料実見に当たりお世話になった。末筆ながら、御礼申し上げる次第である。

注

1 拙著2016「有孔罎付注口土器の正体」『研究連絡誌』

第77号 千葉県教育振興財団

2 前回文献リスト23

参考・引用文献

- ① 秋田市教育委員会1985『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ② 常陸大宮市教育委員会2009『茨城県常陸大宮市上ノ宿遺跡－第2次調査I－発掘調査報告書』
- ③ 茂木町松の木遺跡調査団 2005『松の木遺跡調査報告書1』
- ④ 栃木県文化振興事業団 1994『古宿遺跡発掘調査報告書』
- ⑤ 栃木県文化振興事業団 1997『浄法寺遺跡』
- ⑥ 栃木県史編さん委員会 1981『栃木県史 通史編1 原始古代一』
- ⑦ とちぎ未来づくり財団 2016『岩舟台遺跡』
- ⑧ 茨城県教育財団1995『(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書』
- ⑨ 茨城県教育財団1994『西ノ脇遺跡, 前田村遺跡』
- ⑩ 茨城県教育財団1999『伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4 前田村遺跡G・H・I区』
- ⑪ 茨城県教育財団2009『大谷貝塚』
- ⑫ 茨城県1979『茨城県史料=考古資料編 先土器・縄文時代』
- ⑬ 茨城県教育財団1986『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 小場遺跡』
- ⑭ 常陸大宮市教育委員会2014『滝ノ上遺跡I』
- ⑮ 茨城県教育財団1997『伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 前田村遺跡C・D・E区』
- ⑯ 千葉市教育振興財団2004『千葉市平和公園遺跡群II』
- ⑰ 船橋市教育委員会2017『前貝塚堀込貝塚(5)』
- ⑱ 佐倉市教育委員会1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要II』
- ⑲ 千葉県文化財センター1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』
- ⑳ 佐倉市教育委員会1974『飯重』
- ㉑ 千葉市教育振興財団2007『千葉市下泉町遺跡群』
- ㉒ 群馬県埋蔵文化財事業団 2007『下元屋敷遺跡・下田遺跡(1)』
- ㉓ 笠懸野岩宿文化資料館 1999『群馬の注口土器』
- ㉔ 群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『上柳沢遺跡』
- ㉕ 群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『徳丸仲田遺跡(2)』
- ㉖ 群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『林中原II遺跡(2)』
- ㉗ 富岡市教育委員会2017『上北原遺跡 大牛下原遺跡(松義西部地区遺跡群I)』
- ㉘ 安中市教育委員会2017『西横野中部地区遺跡群』
- ㉙ 群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『横壁中村遺跡(12)』
- ㉚ 堀ノ内遺跡発掘調査会2002『堀ノ内遺跡－第1次発掘調査報告書』
- ㉛ 岩槻市遺跡調査会1976『黒谷田端前遺跡』
- ㉜ 白岡町教育委員会1983『皿沼遺跡発掘調査報告書』

- ③③ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団2017『中井遺跡』
- ③④ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008『大木戸遺跡Ⅰ』
- ③⑤ 日高市教育委員会2006『寺脇』
- ③⑥ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008『神ノ木2遺跡』
- ③⑦ 板橋山之上遺跡調査団2000『板橋山之上遺跡発掘調査報告書』
- ③⑧ 都営川越道住宅遺跡調査会1999『武蔵国分寺跡西方地区 武蔵台東遺跡Ⅱ』
- ③⑨ 吾妻考古学研究所2009『東京都八王子市小田野遺跡第4次・第5次発掘調査報告書』
- ④⑩ 大成エンジニアリング埋蔵文化財部2009『東京都渋谷区鶯谷遺跡』
- ④⑪ 東京都埋蔵文化財センター1989『多摩ニュータウン遺跡昭和62年度（第6分冊）』
- ④⑫ 東京都埋蔵文化財センター2004『多摩ニュータウン遺跡No. 235・316・482遺跡』
- ④⑬ あきる野市前原遺跡調査会2010『前原・大上・北伊奈』
- ④⑭ 東京都埋蔵文化財センター2009『多摩ニュータウン遺跡No. 72・795・796遺跡(14)』
- ④⑮ 忠生遺跡調査会2011『東京都町田市忠生遺跡B地区（Ⅱ）』
- ④⑯ 青梅市史編さん委員会1995『青梅市史 上巻』
- ④⑰ 相模原市大島上ノ原遺跡発掘調査団1996『大島上ノ原遺跡』
- ④⑱ 神奈川県立埋蔵文化財センター1994『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』
- ④⑲ 横浜市ふるさと歴史財団2005『月出松遺跡・月出松南遺跡』
- ⑤⑩ 十日町市教育委員会 1998『笹山遺跡発掘調査報告書』
- ⑤⑪ 新潟県埋蔵文化財調査事業団2005『磐越自動車道関係発掘調査報告書-北野遺跡Ⅱ（上層）図版編』
- ⑤⑫ 朝日村教育委員会2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅢ-アチャヤ平遺跡上段（本文・観察表編）』
- ⑤⑬ 三条市教育委員会2013『五百川遺跡』

- ⑤⑭ 長野県埋蔵文化財センター2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24』
- ⑤⑮ 児玉卓文1979「信州新町宮平遺跡の注口付深鉢形土器」『長野県考古学会誌』34
- ⑤⑯ 松本市教育委員会1997『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡緊急発掘調査報告書』
- ⑤⑰ 山梨県埋蔵文化財センター1997『大月遺跡』
- ⑤⑱ 山梨県埋蔵文化財センター1987『金の尾遺跡 無名墳（きつね塚）』

挿図出典（凡例 挿図番号1：文献番号97は前回リスト番号、⑬は今回リスト番号）

第1図

1：②②、2：④⑦、3：③⑩、4：③⑦、5：①⑥、6：①⑦、7：③⑧、8：④⑧、9：②、10：①⑧、11：⑤⑨、12：②③、13：③、14：④、15：④⑨、16：④⑩、17：①⑨、18：⑦③、19：⑦②、20：⑤⑩、21：⑧⑥、22：⑤、23・24：⑤④、25：①⑩、26：②⑩、27：①⑥、28：③①、29：⑧⑩、30：⑥⑧、31：⑤⑦、32：③②、33：⑧、34：②①

第2図

1：④①、2：④②、3：②④、4：②⑤、5：⑤④、6：⑨、7：①②、8：④③、9：④⑥、10：⑥⑤、11：⑥、12：⑬、13：⑤⑤、14：⑤③

第3図

1：①⑩、2：⑦、3：②⑥、4：①①、5：⑤⑧、6：④④、7：③③、8：①、9・10：⑤④、11：②⑦、12：①②、13：⑤⑥、14：③④、15：①②⑤、16：③⑤、17：⑥⑥、18：②⑧、19：①④、20：①③、21：①⑤、22：⑧、23～25：①⑥、26：①②、27：④⑤、28：⑤②、29：③⑥、30：⑧④、31：⑦③、32：⑨⑧、33：④⑥

第4図

1：⑤①、2～4：⑤②、5：⑤③、6：①⑩、7・8：②⑨